

IAUD Newsletter vol.15 第8号(2022年11月号)目次

1. 古瀬理事長 UD2022 国際会議参加報告…………… 1
2. 活動報告:CM 字幕プロジェクト 筑波技術大学で講義…………… 5
3. UD 検定オンライン第 27 回初級及び第 17 回中級開催のご案内…………… 8
4. IAUD 2022 年 11 月の予定…………… 8



人間開発の UD が世界を変える

古瀬理事長 UD2022 国際会議参加報告



イタリアのブレシア市で開催された UD2022 全体会合の会場風景

イタリア北部にあるブレシア市で 2022 年 9 月 7 日(水)から 9 日(金)まで開催された「第 6 回 International Conference on Universal Design(UD2022)」に、古瀬敏理事長が参加しました。

この会議は、ヨーロッパで隔年開催されてきている UD をテーマとした国際会議です。6 回目となる今回は、「Transforming our World through Universal Design for Human Development(人間開発の UD が世界を変える)」をテーマに、UDの専門家や研究者による基調講演や論文発表が行われました。

今号の Newsletter では、国際会議の概要とブレシア市の様子を古瀬理事長が報告します。

オンライン・対面参加を併用

この会議は 2012 年にノルウェーのオスロ市から始まり、2014 年にはスウェーデンのルンド市、2016 年にはイギリスのヨーク市、2018 年にはアイルランドのダブリン市、2021 年には フィンランドのヘルシンキ市で開催されてきた。南ヨーロッパで初の開催となる今回は、イタリア北部にある3つの大学、地元のブレシア大学、トリエステ大学、ヴェネツィア大学の共同開催となった。

ヘルシンキで開催された前回は、新型コロナウイルスのために 1 年延期したうえ、結局はオンライン開催となったので、顔を合わせるのとは 4 年ぶりということになった。

論文募集はいつものとおりになされたのだが、パンデミックの先行きが見通せなかったせいか、いつもと比べて数が少なかったようである。

結果として、地元イタリアからの発表が目立つことになった。遠い国から参加するには旅費を確保しなければならないので、いつもどうするか思案するわけだが、今回は開催されるかどうか不確定なことも相まって、手を挙げなかった研究者もけっこういたのであろう。

とはいえ、直接参加が難しければオンライン参加で、というのはこの 2 年ほどの間に当たり前になったので、それを織り込んでエントリーした研究者もいた。

オンライン参加だと公式ディナーなどの費用がかからないため、登録費が割引になるのを利用したということであろう。とくに、発表業績を増やさないといけない若手研究者にとっては、以前に比べて便利になったと言える。

外国旅費が確保できないと「ノーショウ」ということで、とくにかつては顔を現さない日本人研究者の評判が悪かったのだが、それも今は昔。もっとも、今回は機転を利かせた日本人はいなかったらしく、プログラムを見る限りでは日本からのオンライン参加発表はなかったようで、日本人の参加者は現地に顔を出した私と東洋大学教授、そしてデンマークで働いている研究者の 3 名だけだったようだ。



UD2022 開催の案内掲示

UD と文化遺産の取り組みが多数発表

会場のブレシア大学は、旧市街から北に歩いて 30 分ほどの場所だが、まちの南北に地下鉄が走っていて、アクセスは便利である。公道を挟んで南北に広がっているキャンパスの両方にある講堂と教室とを使って、全体会合と論文セッションとが設定された。

論文セッションは多いときでも 3 つの同時進行だったので、聴きたいのを逃すということとはあまりなかった。それでも時間がぶつかるのがゼロではないのは、プログラム編成の難しさを示している。

発表論文は UD のさまざまな分野にわたっているが、もともと歴史的文化財のアクセシビリティが明示的に挙げられていたこともあって、それに関するさまざまな取り組みが報告されたのが特筆できよう。ちなみに私の論文もその範疇に属している。プログラムはウェブで閲覧できる。

※UD2022 プログラム:<https://ud2022.unibs.it/conference-programme>

3 日間で 4 つの基調講演、7 つの論文セッション、2 つのミニセッション

初日の夕方には、肩のこらない「ミニセッション」というのが設定された。これは、論文を提出していない研究者が発表し、参加者と討論を行うもので、飲み物とつまみを片手に研究者が語るエピソードに聞き入った。

翌日も同様にミニセッションがあった後、三々五々まちなかに移動、午後 8 時からの公式ディナーに加わった。その会場は、ユネスコ世界遺産で全体が美術館になっているベネディクト派修道院跡地で、まずは庭で飲み物とつまみ、その後ずいぶん暗くなってから室内に移動してディナーを供され、ホテルに戻ったときには真夜中を過ぎていた。公式レセプションやディナーの終了時間が遅くとも 9 時という日本とは大きな違いで、文化的伝統の差を改めて感じた次第。

最終日の論文セッションは全体会合の会場で行われ、その後取りまとめの議論、そして UD に関する Brescia Declaration 2022 の紹介があった。これは 2021 年に作成した Global Manifesto をアップデートしたもので、参加者からの意見を受けた上で公式に発表する旨アナウンスされた。

世界的にみて、国連の障害者権利条約(CRPD)と持続可能な開発目標(SDGs)とが議論の中心になっていることがよくわかる。なお、IAUD もこの宣言の提案主体として加わっている。

素案の PDF 版が、会議論文集と合わせて下記ウェブサイトからダウンロード可能である。
<https://ud2022.unibs.it/home-page>



ミニセッションの風景



提言された UD2022 宣言の草案

ブレシアの重要な歴史遺産

さて、出張でさまざまな場所を実際に訪れるメリットの一つは、オンラインでは困難な体験をするチャンスがあることである。

予めイタリア旅行のガイドブックを図書館から借りだしてブレシア市を見たが、わずか数ページしかなく、さらりとユネスコ世界遺産があると記載されているだけであった。国際線で到達できる空港がある直近の大都市、たとえば日本からの直行便が飛ぶようなところはミラノであって、さまざまな機会に何度か訪問しているが、そこから鉄道で 1 時間もかからないような町で、これほど重要な歴史遺産を見られるとは予想しなかった。

その一つはローマ時代の神殿カピトリウムの遺構で、もう一つはロンゴバルド族の残したベネディクト派修道院遺構であった。ローマ時代の遺構が運良く保存されているのでいちばん有名なのは、バスビオ火山の噴火で埋もれてしまったポンペイだが、ここブレシアでは、裏山が何度か崩れてそれで埋もれてしまったらしく、モザイクタイルと壁画が手つかずに残



カピトリウム神殿

されている部分がある。19 世紀になっていわば「再発見」されて発掘されるようになったということだが、残存部材を極力利用してかつての姿が再現されていて、車いすでも近寄れるように上下移動がうまく考慮されていた。隣には古代の劇場跡があり、こちらはまだ復元途中である。



(左から) カピトリウム神殿内部の(あると気づかれない)段差解消機、発掘された壁画、復元途中のローマ劇場遺構

ベネディクト派修道院はその東側にほぼ隣接しているのだが、その部分も全体としてサン・サルバトーレ＝サンタ・ジュリア美術館となっていて、いちばん古い部分のモザイク(当然これらは修道院建設以前のもの)などはよく見られるように回遊デッキをつくっており、それ以降の修道院の構造体も、できるだけ見られるように構成されていた。美術館全体を見て回ると丸一日かかるほど、さまざまなものが提示されている。



発掘されたモザイクタイル(写真左)とベネディクト派修道院の構造体

歴史遺産とアクセシビリティ

施設のアクセシビリティはよく考えられており、エレベータが難しい場合は階段昇降機を設置している。

しかし、最大の問題はそもそもそこにどうやってたどり着くかである。欧州の古い都市のご多分に漏れず、この付近の道路は歩道も含めて敷石であって、車いすでの移動は非常に困難である。苦勞したくなかったら自動車で入り口まで乗り付けるしかない。

ちょうどカピトリウム神殿の南側にあるフォルム(古代ローマ都市の公共広場)の復元に当たって、かつてそうだったはずとして丸い砂利を用いて工事を行っていたが、自身が車いすを使っているブレシア大学の研究者は、「オ



ローマ時代の遺構付近の丸砂利舗装の道路

オリジナルの石を用いるのでなければ基本はアクセスがしやすいようにやり方を変更すべき」と吐き捨てるように言った。

オリジナルはとくに失われているので、「かつてはたぶんこうでした」というサンプル部分の復元提示だけで十分、ということである。これはわが国で現在議論されている名古屋城「復元」に当たっても議論されるべき遺跡のありようの基本的理念に関わることであろう。



聴覚障害のある学生と新しい字幕を考える 活動報告:CM 字幕プロジェクト 筑波技術大学で講義



筑波技術大学総合デザイン学科の実習授業で講義する CM 字幕プロジェクトの高橋主査

字幕付き CM 普及を目的に活動している CM 字幕プロジェクトは、2022 年 9 月 27 日(火)に国立大学法人筑波技術大学総合デザイン学科で行われた字幕付き CM をテーマにした授業において、聴覚障害のある学生を対象に IAUD やプロジェクトの活動などを紹介する講義や意見交換を行いました。

今号の Newsletter では、当日の様子を同プロジェクトの高橋雅尚主査が報告します。

視覚・聴覚障害者を対象とした唯一の国立大学

筑波技術大学は、視覚障害者と聴覚障害者を対象とした日本国内唯一の国立大学で、茨城県つくば市に視覚部と聴覚部の 2 つのキャンパスがあります。

同プロジェクトの松森果林副主査は同大学で非常勤講師をしており、今回は聴覚障害のある学生 4 人を対象とした「デザインプロジェクト実習」の対面授業に、高橋と宮城英明メンバー(ライオン株式会社)



オンラインで参加した宮城メンバー(写真左)と手話通訳者

がゲストとして参加しました。

当日は、松森副主査と高橋は教室に出向き、宮城メンバーと手話通訳者はオンラインで参加するハイブリッド形式で実施しました。

IAUD と CM 字幕プロジェクトの活動紹介

まず、松森副主査からは、自身が「CM にも字幕を」と提案を始めたきっかけや、これまで 29 年にわたる取り組みの紹介とその意義についての話がありました。

その後、高橋は IAUD と CM 字幕プロジェクトの活動や実績、2019 年と 2020 年に実施した「字幕付き CM に関するアンケート」※の分析結果を報告し、生活者のニーズや声を紹介しました。

さらに、宮城メンバーは広告主の立場から、「字幕付き CM を 10 倍楽しむために！」として、字幕つき CM に関するルールや記号、気持ちやニュアンスの表記の工夫など、一般的には知られていないエピソードを説明しました。

※「字幕付き CM に関するアンケート」分析結果を掲載した IAUD Newsletter2019 年 10 月号は[こちら](#)をご覧ください。



同大学非常勤講師の松森副主査

字幕付き CM に関する学びと必要性を実感

学生は全員聴覚障害者ですが、聴力の程度やコミュニケーション手段は多様で、手話を第一言語とする学生や、手話が苦手な学生など様々です。そのため、教室前方の 3 つのスクリーンには、ZOOM 画面(話者と手話通訳者)、UDトークによる同時文字通訳、パワーポイント画面をそれぞれ表示するなど、多様な情報保障を提供する環境が整備されています。

さらに、プレゼン用パワーポイントには話し言葉をテキストで表示する配慮もしました。

そのおかげで、学生たちが興味をもって熱心に聞き入っていたのが強く印象に残りました。

講義終了後に学生が提出したレポートにみられる主なコメントは以下のとおりです。



スクリーンには ZOOM 画面、同時文字通訳、パワーポイント画面を表示

・「オープンキャプション(常時表示され、表示・非表示の切り替えができない字幕)」と「クローズドキャプション(表示・非表示の切り替えができる字幕)」という言葉は初めて学んだ。個人的には障害の有無に関係なく楽しみたいと考えているため、オープンキャプションを中心に、擬音や話者名などのセリフはクローズドキャプションにするなど使い分けができれば理想的。

・クローズドキャプションの文字、記号には意味があることを初めて知り、とても印象に残った。

・字幕付きCMは聴者にも情報を伝えるために有効な手段の1つだと考え、障害の有無に関係なく全ての視聴者の暮らしをより豊かにするためには必要なことだと感じた。

・「人は現状が当たり前だと思っている」ということを先ず認識する必要があると思った。何かを改善したければ、当事者(自分)が現状に疑問を持たなければならない。

このように、社会の課題への向き合い方や、字幕付き CM に関する学びと必要性を強く感じたようです。

一方で、「最近若者の中ではテレビを見ない人が増えている。自分の周りの聴覚障害者も大半はスマートフォンで情報を得ることが多いため、そういう背景が、逆にテレビのCMに字幕を付けることの重要性を強く感じない企業もあるのではないか」という現状や課題提起もありました。

また、聞こえる家族の中で育った学生からは、「今まであまり字幕付き CM を見たことがなく、私の家族はみんな聴者なので、そもそもテレビを字幕付きでみるという習慣が無かった。今回の講義を通して、字幕の表現の工夫を知り、ぜひ字幕付きで CM やテレビを楽しみたいと感じた」というコメントもありました。

テレビ番組の字幕が普及している現代であっても、聴者家族に気をつかって生活をしていることに驚くとともに、胸が痛みました。こうしたマイノリティならではの生きにくさも、当事者の声として広告主に対してだけでなく、広く社会に伝える責任を感じました。

IAUD への興味と期待も

IAUD の活動に関しては、「聴覚障害者としての不便を無くすために自分にできることで共に解決を目指したいと考えているので、そういった活動には興味がある。字幕の他にどのような活動があるのか、現状を知るために参加してみたいと考えている」、「IAUD や字幕付き CM 推進協議会の活動に興味があり、今後も参加して何らかの形で関わっていくことができたら良い」など、IAUD の活動への興味を持ってくれたことが分かりました。

若い学生の視点は、我々にとっても新鮮で学びになることも多く、今後は共に活動できる機会を考え、「新しい字幕のカタチ」への実現可能性なども引き続き検討・追求していきます。



在宅で好きな時に UD 資格習得

UD 検定オンライン第 27 回初級及び第 17 回中級開催のご案内

IAUD は「第 27 回 UD 検定・初級」及び「第 17 回 UD 検定・中級」をオンラインで開催します。

「UD 検定・初級」は、UD に関する基礎的な知識を学習する講習と力試し問題、検定試験(30 分・50 問)のセットです。問題は全て受講した講習内容から出題されます。

「UD 検定・中級」は、力試し問題と検定試験(70 分・129 問)を受けていただきます。試験問題は、公式テキストブック「知る、わかる、ユニヴァーサルデザイン」に準拠して出題されます。受験される方は事前に公式テキストブックをご購入し、ご自身で学習された後に試験をお受けください。

初級、中級とも合否は検定試験終了後すぐに判定され、合格者には認定証を発行します。

「第 27 回 UD 検定・初級」の申し込み受付は 11 月 10 日(木)まで、「第 17 回 UD 検定・中級」の申し込み受付は 12 月 21 日(水)までです。この機会に是非、ご利用ください。

※「第 27 回 UD 検定・初級」詳細・申し込みは[こちら](#)をご覧ください。

※「第 17 回 UD 検定・中級」詳細・申し込みは[こちら](#)をご覧ください。※

※「オンライン第 1 回 UD 検定・初級」開催掲載の Newsletter は[こちら](#)をご覧ください。

※「オンライン第 1 回 UD 検定・中級」開催掲載の Newsletter は[こちら](#)をご覧ください。



中級受験に必須の
公式テキストブック

IAUD 2022 年 11 月の予定

月	火	水	木	金	土	日
	1	2	3 文化の日	4	5	6
7	8	9	10 第27回UD検定 初級申込締切	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23 勤労感謝の日	24 14:50~ 衣のUDPJ オンライン会合	25	26	27
28	29	30				

次号は 12 月上旬発行予定

特集:CM 字幕プロジェクト 字幕 HP 運用開始、IAUD 国際デザイン賞 2021 受賞紹介⑧

一般財団法人国際ユニヴァーサルデザイン協議会 事務局
e-mail:info@iaud.net